

認識的不正義概念の可能性を検討する ——事例分析を通じた拡張の提案

Exploring the conceptual potential of epistemic injustice through case
analysis: a proposal for the extension of the concept

寺田 晋

認識的不正義概念の可能性を検討する ——事例分析を通じた拡張の提案

寺田 晋

Exploring the conceptual potential of epistemic injustice through case analysis: a proposal for the extension of the concept

Abstract

This paper examines Miranda Fricker's concept of epistemic injustice. It applies one type of epistemic injustice, which Fricker names "testimonial injustice," for the analysis of discriminatory policing known as "stop-and-frisk" and asks if the concept can be a useful analytical tool for empirical case study. This paper argues that testimonial injustice as defined by Fricker needs to be extended so that it can take into account non-epistemic factors which are constitutive of the situation where testimonial injustice happens. Three factors this paper proposes to include into analysis in the case of stop-and-frisk are cognitive technology, pre-discursive bodily expression, and non-testimonial material evidence. This paper suggests that taking these factors into account is necessary for devising corrective measures for testimonial injustice which do not depend on the cultivation of the virtue of hearers.

Keywords: epistemic injustice, testimonial injustice, social epistemology, racial profiling, policing

1. はじめに

知る人としての能力の点で人を不当に扱うことを意味する認識的不正義 (epistemic injustice) は、認識論と倫理学が切り離されたことで長らく見過ごされてきた認識という実践に特有の不正に光を当てる概念である。M・フリッカーが2007年の著作 *Epistemic Injustice* で提唱して以来、この概念はさまざまな角度から論じられてきた (Daukas 2020; Pohlhaus 2017)。認識論と倫理学を架橋するこの企ては広範な影響を与えており、近年では「認識的抑圧 (epistemic oppression)」 (Dotson 2014) や「認識的搾取 (epistemic exploitation)」 (Bernstein 2016) といった規範的概念のアナロジーによって認識論を拡張

する試みがさまざまになされている。ここでは、こうした知的革新をもたらしてきた認識的不正義の概念に対して建設的な批判を行う。以下では、フリッカーによる認識的不正義の定義を確認し（第二節）、先行研究による批判を整理したうえで（第三節）、認識的不正義の概念を現実の事例の分析へと適用することを通じて、そこから見えてくる問題を指摘する。認識的不正義は、知識の伝達や経験の理解といった主体による認識的な実践に特有の不正を明るみに出すことを目指す概念である。そのため、フリッカーの理論では認識的実践以外の要因についての分析が考察から除外されている。本稿の批判は、そうした認識的実践以外の要因を捨象することで見落とされる問題の指摘に向けられる（第四節）。具体的には、「ストップ・アンド・フリスク」と呼ばれる警察権力の行使のなかで証言的不正義が加えられる場面を分析する。本稿では、この場面の成立にかかわる三つの要因とそのそれぞれに関連する問題を指摘し、それらの問題を扱えるように認識的不正義をめぐる議論を拡張していくことを提案する（第五節）。この提案は徳の涵養というフリッカーの提唱する認識的不正義の是正策とは異なる介入の可能性を開くものである。

2. 認識的不正義の定義

認識的不正義の概念については、日本でもたびたび紹介されている（榊原 2020；佐藤 2019a, 2019b；鶴田 2022）。¹⁾ 以下では簡潔にその内容を確認しておこう。

冒頭で述べたように、認識的不正義は、知る人（knower）としての人がもつ能力に加えられる不正義と定義される。フリッカーは、この認識的な性格をもつ不正義を、それが傷つける認識的能力の側面に従って、証言的不正義（testimonial injustice）と解釈的不正義（hermeneutical injustice）の二つに区分している。知識を伝達する能力に対して加えられる不正義である証言的不正義は、話し手の社会的アイデンティティに対する偏見のために聞き手が話し手に対する信頼性の水準を引き下げることとして定義される。証言的不正義の典型例とされる事例をみてみよう。フリッカーはアンソニー・ミンゲラの *The Talented Mr. Ripley*（映画『太陽がいっぱい』（1960）、およびそのリメイク版『リプリー』（1999）の脚本）の一場面を用いている。謎の死を遂げたディッキー・グリーンリーフについて、ディッキーの婚約者であるマージとディッキーの父親で裕福な実業家であるハーバートが会話する場面である。マージはディッキーの友人であるトム・リプリーがディッキーを殺害したと疑っている。その疑いにはしっかりとした根拠がある。彼女が

ディッキーに贈った指輪——ディッキーはそれを絶対に外さないと誓っていた——をトムが持っていたのである。しかし、言葉巧みなトムにすっかり取り入られているハーバートはマージの言葉を信じない。それどころか、彼は次のように述べてマージを黙らせる。「マージ、女の直感はある。そしてまた事実というものがある」。この発言が証言的不正義の例とされる。この場合、ジェンダーに対する偏見から、本来であれば信頼されるべき根拠のある発言が信頼されず、話し手は沈黙を強いられている。フリッカーがあげるもう一つの事例はハーバー・リーの小説『アラバマ物語』である。ここでは白人女性をレイプした罪に問われた黒人青年トム・ロビンソンが、左利きと推測される真犯人とは異なり、幼い頃の怪我のために左腕が使えないという明白な証拠があるにもかかわらず、白人だけからなる陪審によって有罪と判決される。これは人種に対する偏見に起因する証言的不正義とされる。

証言的不正義が知識を伝達する能力に加えられる不正義であるのに対し、解釈的不正義は、自分や他者に対して経験を理解可能にする能力に加えられる不正義である。これは集合的な解釈資源 (collective interpretive resources) の格差のために社会的経験の理解という点で不利な状況に置かれることとして定義される。フリッカーの記述にはゆれがあるが、解釈的不正義を描写する際には、多くの場合、経験を「理解することが困難 (obscure)」だとか「ガラス越しにぼんやりと (through a glass darkly)」(Fricker 2007: 148) といった表現が用いられている。つまり、解釈的不正義は何らかの苦しみや不当さを感じているにもかかわらず、その当事者が自らの経験をうまく理解できないという状況を想定している。具体例をみてみよう。フリッカーはアメリカのフェミニスト、スーザン・ブラウンミラーの回顧録から二つの事例を取り出している。一つは、子どもの出産後にうつに苦しんでいた女性の事例である。この女性は友だちに連れられてフェミニストの集会に参加し、グループに分かれて話をするなかで「産後うつ」について知り、自分や夫が責めてきたことの原因は自らの個人的な欠点ではなく、生理学上の問題や孤立という社会的問題だと理解するに至る。もう一つは「セクシャル・ハラスメント (以下、セクハラ)」という概念の考案につながった事例である。職場の上司から度重なる性的被害を受けた女性 (フリッカーは述べていないが黒人女性である) が、身体の不調を抱えて退職を余儀なくされたにもかかわらず、退職理由を自己都合とするしかなく、失業保険も受給できないでいたところ、女性たちと語り合うコンシャスネス・レイジングのなかで、皆が同じような経験をしていることが判明し、セクハラ概念の考案につながったという。この場

合、セクハラという概念の欠落が解釈的不正義にあたる。このほかにもフリッカーは自らの同性愛の経験を理解することに困難を抱える少年の事例などを用いて解釈的不正義を説明している。

セクハラの実例は仕事や失業保険の受給をめぐる具体的な被害が生じているので、不正義としてイメージしやすいかもしれない。だが、フリッカーはこうした社会経済的な被害を認識的不正義の副次的な危害と位置付けている (Fricker 2007: 43-51)。認識的不正義の主たる危害とされるのは、知る人としての能力の点で人を不当に扱うことそれ自体である。知る人としての能力は理性という人間的な価値にとって本質的な能力なので、この能力を否定されることは、その人が完全な人間ではない存在だという社会的意味をもつとされる。さらに、認識的不正義にはアイデンティティの形成を妨げ、歪めるという危害もあるとされる。これはフェミニズムの基本的発想に基づいている。自己成就する予言のように、偏見は偏見にそっくり当てはまるようなアイデンティティの形成を促すというのである。たとえば、女性は知的にも気質的にも政治的判断に向いていないという偏見によって政治的問題に関する会話から排除され続ければ、その女性は本当に政治的判断に向いていない人物になってしまうという (Fricker 2007: 54-5)。ここでは詳述できないが、フリッカーは認識的不正義の危害についての以上の分析を E・クレイグや B・ウィリアムズが用いる系譜学の方法を使って精緻化している。そこでは、情報を伝える主体である情報提供者 (informant) と、情報を取り出すことができる客体である情報源 (source of information) とが区別され、人を不当に情報源としてのみ扱う認識的客体化 (epistemic objectification) が証言的不正義に内在する危害だとされる (Fricker 2007: 132-3)。

ここまでの記述からわかるように、フリッカーの説明では偏見が重要な役割を果たしている。証言的不正義の場合、「女性」、「黒人」、「労働者」といった話し手の社会的アイデンティティに対する偏見が証言的不正義を引き起こすとされる。これに対し、解釈資源の格差という構造的な問題である解釈的不正義は、不正義の実行者 (culprit) が存在しない (Fricker 2007: 159)。しかし、解釈資源の格差自体は、社会的意味を生み出す実践に参加することを阻まれる解釈的周辺化 (hermeneutical marginalization) から生じるのであり、そこには社会的に弱い集団に対する偏見が働いているとされる。それゆえ、解釈的不正義も、結局のところは、構造的なアイデンティティに対する偏見 (structural identity prejudice) に由来するとされる (Fricker 2007: 155)。

最後に触れておかなければならないのは、認識的不正義の不当性を偏見に見出すフリッ

カーが、偏見の自己修正を認識的不正義の是正策として提唱しているということだ。フリッカーは徳倫理の立場から認識的な徳の涵養によって認識的不正義に対処しようとする。証言的不正義の場合、求められる証言的正義の徳は、偏見がなければ与えられていたであろう水準へと信頼性を上方修正し、偏見の影響を打ち消すこととされる (Fricker 2007: 91-2)。なお、フリッカーは明言していないが、このことは、どのような発言であれそれを信じるように態度を変更するということを意味しないだろう。信頼性は発話が提示する真理と証拠との適合によって測られるとされているので (Fricker 2007: 19)、発話が信頼される場合、その発話が客観的な証拠と適合することは当然、前提されているはずである。一方、解釈的不正義が表面化するのは、相互行為において話し手が自らの経験を相手に対して理解可能にすることができない場面であり、このような場面で聞き手側に求められる態度が解釈的正義の徳とされる。そうした徳としては、解釈資源の格差に対する注意深さや敏感さ、言われていないことにも耳を傾ける姿勢などが含まれる。十分な時間がある場合は自分の仮定を放棄し、他の適切な人から話を聞いて証言を補強することが、十分な時間がない場合は判断を保留することが、望ましい対応だとされる (Fricker 2007: 169-72)。認識的不正義を制度的に是正する可能性は否定されていないが (Fricker 2007: 176-7)、フリッカー自身が勧める是正策はここでみたような徳の涵養である。

3. 先行研究

以上のように定義される認識的不正義の概念に対しては、さまざまなかたちで批判を通じた拡張が試みられている。代表的なものをまとめておこう。

認識的不正義全体にかかわる批判としては、D・コーディ (2010, 2017) の批判がある。コーディは認識的不正義を情報や教育へのアクセスという分配的正義の観点から検討することを主張している。これはフリッカーが認識という実践に特有の不正義を特定することを優先して意図的に検討から除外した観点である。フリッカーは、コーディの批判を受けて、自らの考える認識的不正義を「差別的な (discriminatory)」認識的不正義と呼び直し、分配的な認識的不正義との差異化と共存を図っている (Fricker 2017: 53)。

証言的不正義に対する批判としては、それを信頼性の過剰ではなく不足の問題とする定義が批判されている。フリッカーも、過剰な信頼が話し手の不利益になる場合があることは認めている。しかし、証言的不正義を構成するためには、そのような経験が累積する必

要があるとしている (Fricker 2007: 21)。想定されているのは、エリートの子として周囲から過剰に信頼されて育つ結果、偏狭な人物となり、認識的徳を身につけられないという例である。これに対し、J・メディーナ (2011) はまさにこの例は証言の交換が行われる個々の場面に焦点を置いたフリッカーの分析の限界を物語っているとして、より広い社会的、歴史的文脈のなかで信頼性の過剰の問題を分析すべきだと主張している。また、E・デイヴィスは、周辺化される人々が当事者にしかアクセスできない経験にもとづく情報を提供できる存在として受入れられる一方で、実際には名ばかりの存在 (tokens) として扱われることを「認識的他者化 (epistemic othering)」と呼び、これを信頼性の過剰がもたらす証言的不正義と位置づけている (Davis 2016: 490)。ここでの「他者化」という表現は、G・ポールハウス (2014) による別の批判と結びついている。ポールハウスによれば、フリッカーによる認識的客体化の分析は不正確である。というのも、証言的不正義においては信頼すべき証言を信頼しないことが問題になっていたのに、客体=モノから得られる情報については、知覚する側が非合理的でない限り、それを信頼すべきときに信頼しないということとはできないからだ。それゆえ、証言的不正義の被害者は客体ではなく、加害者によって主体性が制約された存在として扱われていると捉えるべきだという。ポールハウスはそのような存在を「他者」と呼んでおり、デイヴィスもこの用法に従っている。

最後に、解釈的不正義に関しては、解釈資源を一枚岩のものとして捉える見方が批判されている。フリッカーは、社会全体で共有される解釈資源のなかに、周辺化される集団の経験を理解するのに必要な解釈資源が欠如することとして解釈資源の格差を捉えている。これに対し、R・メイソン (2011) は、人種差別が原因となる無知を指す C・ミルズの問題「白人の無知 (white ignorance)」(Mills 2007) から着想を得て、周辺化される集団自身は自らの経験を理解し表現する解釈資源をもつのだが、支配的な言説がそれを受け入れないことにより沈黙させられる場合があることを指摘している。そのような支配的な集団による周辺化された集団の解釈資源の無視をポールハウス (2012) は「故意の解釈的無知 (willful hermeneutical ignorance)」と呼んでいる。以上の批判に対して、フリッカーは当初から理解可能性の程度には幅があると指摘していたことを主張している。つまり、本人が自分の経験を適切に理解できない状況に置かれる「最大限の解釈的不正義」の場合と、本人は自らの経験を理解することができ、ほとんど誰にでもその経験を伝えることができるのだが、とくにそれを伝える必要がある他者に対しては伝えることができないという「最小限の解釈的不正義」の場合があるという (Fricker 2016: 165)。この区別に従えば、

故意の解釈的無知は最小限の解釈的不正義に包摂されることになる。

4. 問題

本稿は以上のような建設的批判を行ってきた先行研究につらなる試みとして、いまだ十分には検討されていない、いくつかの問題を指摘する。ここでの関心は、理論的に検討されてきた認識的不正義の概念を、現実の事例の分析へと適用できるようにすることにある。認識的不正義の是正を目指すのであれば、実際の事例について認識的不正義が成立しているかどうかを判断するとともに、その介入策を考案できなければならないと考えるからだ。もちろん、フリッカーが提唱する徳の涵養は認識的不正義の解消にとって不可欠だろう。しかし、偏見の根強さを考えれば、すべての人が理想とされる徳を身につけることができるとは考えられない。そうである以上、徳の涵養以外の介入策も模索されるべきである。ところで、フリッカーによる認識的不正義の概念は、相互行為における知識の伝達や経験の理解といった主体による認識的な実践に特有の不正を特定しようとする概念である。それゆえ、認識的不正義の概念を現実の事例に適用すると、複合的な相互行為のなかの認識的实践に光が当てられることになる。逆に言うと、認識的不正義の概念からは認識的实践以外の要因——より正確には、フリッカーが認識的实践として想定している実践以外の要因——が捨象されるということである。だが、現実の相互行為はそこで捨象される多様な要因が絡み立って成立しているのであり、それらは認識的不正義が発生する状況の成立にさまざまなかたちでかかわると考えられる。たとえば、『アラバマ物語』の事例ではトム・ロビンソンに犯罪の容疑がかけられ起訴に至るまでの過程や白人のみを陪審とする裁判制度などが要因となって、認識的不正義が加えられる状況が成立している。そうであれば、認識的不正義の是正を目的とした事例分析はフリッカーの認識的不正義の概念からは抜け落ちてしまうこうした要因も考慮に入れることが望ましいだろう。認識的不正義が発生する状況の成立に寄与する要因を特定できれば、その要因に介入することにより、場合によっては、認識的不正義の発生を防ぐことが可能になると予想されるからだ。

そこで以下では、認識的不正義が生じる実際の事例を取り上げ、認識的不正義が加えられる状況の成立に寄与する要因には、どのようなものがあり、そこからどのような介入策が考案できるのかを検討する。以下では、認識的不正義のなかでも別途検討が必要と思われる解釈的不正義については取り上げず、証言的不正義に的を絞って議論したい。検討す

るのは、証言的不正義の典型例の一つとされる『アラバマ物語』と同型の事例、つまり、犯罪の嫌疑がきっかけとなって証言的不正義が加えられる事例である。具体的には以下の場面を検討する。

ニューヨーク市のハーレムに住む黒人男性が自宅近くの商店に買い物に出かけたところ、二人の警察官に止まるように命じられて、所持品を探られる。警察官は男性から携帯電話、財布、鍵を取り上げたうえで、説明もなしに手錠をし、ある特定の建物から出てきたところかどうかを問う。男性は否定し、自分は隣に住んでいると述べる。一人の警察官が取り上げた鍵をもって、男性の自宅に向かう。その間、もう一人の警察官は男性にマリファナをもっていないか問い、男性が否定すると、男性の靴を外して中を調べ、靴下を上から叩いて調べる。男性がなぜ取り調べをしているのか問うと、警察官はアパートの住人がドアベルを度々鳴らされるという嫌がらせを受けているという通報があり、男性とその特徴が一致するからだと述べる。自宅に行っていた警察官が戻ってきたのち男性は解放される。

この記述はニューヨーク市警のポリシング政策の違法性を争った集団訴訟に証人として参加した男性の実体験にもとづいている (Peart 2011)。ここでは二つの発言——男性が出てきた建物とマリファナの所持についての発言——が信頼されておらず、物的証拠の確認をまっぴらしてはじめて嫌疑が晴らされている。その間、男性は信頼のおける情報提供者ではなく、物的証拠につながる情報源として扱われている。これを「客体」と捉えるか「他者」と捉えるかという上述した問題はあるが、いずれにせよ、このような犯罪の取り締まり行為は証言への信頼性を引き下げるという点で証言的不正義を加える可能性をつねにもつといえる。

自分が無実であることを知っている男性の立場からは、この出来事は肌の色に対する偏見に起因する証言的不正義として経験されうるだろう。ただし、これが客観的にみて証言的不正義にあたるかどうかは、上に書かれた情報だけでは判断できない。判断するためには、警察がもっていた情報を入手し、取り調べ行為に偏見が働く余地があったかどうかを検証する必要がある。このように、真なる事実を確定できる架空の事例とは異なり、実際の事例では証言的不正義の適用をめぐる困難が生じうる。証言的不正義だとその場で判断できるのは *The Talented Mr. Ripley* の場合のように対話者の双方がアクセスできる明

白人事実にもとづく発言が特定の社会的カテゴリーに対する偏見を露わにした発言によって沈黙させられるような場合であり、そうではない多くの場合では、証言的不正義だと判断することは可能だとしても事後的な検証を必要とするだろう。事例分析を行う際のこうした適用上の困難については詳細な検討が必要であり、今後の課題としたい。ここでは上の事例を証言的不正義の可能性をもつ事例として扱うこととし、議論を進める。

以下では、上の事例を手掛かりに証言的不正義が加えられる状況の成立にかかわる三つの要因を指摘する。それは、(1)証言が必要とされる機会の配分、(2)言語以前の身体表現に対する信頼、(3)証言を通じた知識取得への依拠の三つである。これらはそれぞれが検討を必要とする三つの問題を提起する。(1)からは、特定の集団が証言を強いられる機会に不当に多く直面することの問題が指摘される。これ自体は証言的不正義には該当しないが、証言的不正義の危害を被る可能性を高める独自の不正義だといえる。(2)からは、証言以前の表情や身振りといった身体表現が信頼されないことの問題が浮かび上がる。これは命題的知識の伝達に焦点を置く証言的不正義の概念では扱えない問題であり、その拡張を要求する。(3)からは、証言的不正義の概念の構成上の問題が見出される。証言的不正義の概念が問題とするような証言の信頼性が問われる状況は、証拠を残すことで回避できる可能性があるのだが、証言を通じた知識取得を重視する証言的不正義の概念からはそのような可能性が見落とされてしまうのである。以下、順に検討しよう。

5. 批判

5.1 証言の機会的不平等

上の事例のような取り締まりは、一般的に、「ストップ・アンド・フリスク (stop-and-frisk)」と呼ばれる。今野と高橋 (2022) によれば、街頭で停止 (ストップ) を命じ、危険物などを確かめるために着衣を探ること (フリスク) を意味するこの取り締まり活動は、軽微な秩序違反行為を積極的に取り締まることで治安を維持する「秩序維持ポリシング」という戦略のもとに、1990年代中頃にニューヨーク市警によって採用された。上の事例の男性が証人として参加した裁判で違憲性が認められたことがきっかけとなって改革が進められ、現在では減少したが、ピーク時の2011年にはストップの件数が68万5,724件に達したという (今野・高橋 2022: 37)。

裁判では、ストップ・アンド・フリスクが極端に多くマイノリティを標的とする差別的

政策であることが主張された。そのような差別的な取り締まり政策は「レイシャル・プロファイリング (racial profiling)」と呼ばれる。原告側の主張に従えば、2011年にストップを命ぜられた人の約87%がマイノリティ男性であり（黒人53.1%、ラティーノ33.7%）、ストップを命ぜられた人の9割近くは何ら犯罪に関与していなかったという（今野・高橋 2020: 22）。上で見た事例の男性も同様の取り締まりを複数回経験したことを述べている（Peart 2011）。

証言的不正義は個々の証言が偏見のために信頼されないことに着目する。これに対し、レイシャル・プロファイリングの問題は個々の証言ではなく証言の機会に着目する必要性があることを示す。というのも、取り締まりに対する応答という種類の証言は、特定の集団が不釣り合いに多く経験している可能性があり、いったん取り締まりの対象に選ばれると、物的証拠が確認されるまで証言はきわめて信頼されにくくなってしまうからだ。それゆえ、取り締まりを受ける機会が多いほど、この種の証言的不正義の危害を被るリスクは高くなると考えられる。これは機会の不平等の一種であるといえるが、この問題は証言的不正義の概念ではカバーすることができない。そこで、これを証言機会の不平等の問題と呼ぶことにしよう。機会の不平等の是正は証言的不正義を被るリスクを低減させることで、その是正に貢献すると考えられる。

フリッカーは、偏見ゆえにはじめから証言が求められない場合を指して予防的な証言的不正義 (pre-emptive testimonial injustice) と呼んでいるが (Fricker 2007: 130)、証言機会の不平等は取り締まりに対する応答を強いられるという点で、これとは異なる。先行研究のなかでは、白人女性をレイプした容疑で逮捕された少年が、自らの偽りの供述によって有罪とされた事例を分析したR・マッキニーの研究 (2016) が注目される。マッキニーは、こうした偽りの告白や強制された性交への同意といった不当に生み出された証言を「引き出された発語 (extracted locution)」と呼ぶ。引き出された発語の概念は、証言を強いる権力に注目する点で本稿の問題関心と重なる。しかし、言語行為論に依拠するマッキニーは発言を引き出す言語行為に対象を限定している。この点で、証言が強いられる機会の偏りに注目する本稿とは分析対象が異なる。

証言機会の不平等はどうすれば是正できるだろうか。いうまでもなく、取り締まり対象を決定するのは個々の警察官である。それゆえ、個々の警察官の偏見の是正というフリッカーの提案から導きだされる介入策は、証言機会の不平等の是正にとっても重要である。しかし、取り締まりの対象が特定の集団に偏る現象は、警察官個人の偏見が問題となる相

互行為の場面よりも広い文脈のなかで生じている可能性がある。ニューヨーク市警が採用した秩序維持ポリシングでは、ストップ・アンド・フリスクだけでなく、CompStat というコンピュータ・プログラムにもとづく管理システムが導入されている。これは犯罪情報の統計分析にもとづいて警察官を効率的に投入するシステムであり、取り締まり活動が行われる地域はこのようなシステムによって決定されている。このことを踏まえると、証言機会の不平等の問題は、警察官個人の偏見だけでなくデータやアルゴリズムの偏りという問題とも結びつく可能性があることがわかる。

コンピュータを用いたポリシングは、現在ではAIによるビッグデータ分析にもとづく「予測的ポリシング (predictive policing)」へと発展している。CompStat が過去の犯罪情報にもとづいていたのに対し、予測的ポリシングでは、過去の犯罪情報に加えて給料日の期日、季節、酒類販売店の場所、逃走経路、SNS 上の情報などさまざまな変数を使って、犯罪が起ころうな場所や犯罪に関与しそうな人物を予測することが目指されている (Joh 2014: 42-8)。このような予測的ポリシングの発展は、取り締まりをめぐる証言機会の不平等を解消するだろうか、それとも強化するだろうか。理論的には両方の可能性が考えられる。予測的ポリシングは警察官が自らの観察や第三者からの情報といった手がかりよりも確実な根拠にもとづいて取り調べを行うことを可能にするかもしれないし、犯罪が疑われるかどうかで争われる境界的な事例について取り調べを行うように警察官をナッジしてしまうかもしれない (Joh 2014: 55-9)。「〈ビッグデータによる予測〉によって、人びとが実生活において、どのような選択肢や機会を得られ、あるいは奪われているのか」(堀内 2017: 172) という観点から、予測的ポリシングを含むアルゴリズムを用いた与信管理技術の問題を分析している堀内進之介は、データが既存の差別的慣行を反映する結果、アルゴリズムによって差別が行われる危険性を指摘している。実際、アメリカで入国管理に用いられている顔認証システムでは、逮捕率の人種格差が反映された結果、黒人を要注意人物として評価する確率が高くなっていったという (堀内 2017: 175)。一方、山本龍彦は、アルゴリズムによる予測は個人を単位とするより詳細な分析を可能にする結果、集団に対する偏見にもとづく差別を排除できる可能性があることを指摘している (山本 2015: 334-5)。山本が問題視するのは差別の強化とは別種の問題、つまり、アルゴリズムが本人の行動する前にその行動を予測してしまうことで個人の自律を侵害することの問題である。

こうしたいわゆる「AIによる差別」をめぐる問題については別の機会に検討したい。ここではデータやアルゴリズムにかかわる問題が認識的不正義をいわば取り囲むかたちで

存在しており、その発展は認識的不正義の解消や強化に影響を及ぼす可能性があるということを描き出すにとどめる。従来人間によって担われてきた認知的タスクがAIによって自動化されつつある現在、認識的不正義をめぐる議論は個人の認知だけでなく、認知的テクノロジーも対象にすべきだろう。M・ニヘイ（2022）はAI倫理の考察に認識的不正義の概念を適用しているが、本稿もまた認識的不正義をめぐる議論がこうした試みへと拡張される必要があると考える。

5.2 身体表現に対する不信

上述のストップ・アンド・フリスクを経験した男性の事例から気付かされるのは、証言以前に最初になされる応答は、止まれという命令とそれに対する反応だということだ。同じ男性が経験したストップ・アンド・フリスクのもう一つの事例を見てみよう。この男性は18歳の誕生日にいとこや友人と一緒に外食に出かけたところ、警察の車に取り囲まれ、地面に伏せるよう命じられた。男性が伏せると警察官は男性に銃口を向けた状態でポケットを探り、財布に入っていた身分証明書を確認した後、皮肉な口調で「誕生日おめでとう」と言ったという（Peart 2011）。この場面では、男性は証言を求められていない。しかし、命じられたとおりに地面に伏せるという行動は、命題的知識の伝達というかたちはとっていなくとも、抵抗の意思がないというメッセージを伝えている。この身体表現が信頼されるかどうかということは、言葉による証言が信頼されるかどうかには劣らず重要だろう。このことは信頼が取り払われてしまった事例をみると、より鮮明になる。2016年にはフロリダ州で自閉症者の介助をしていた行動療法士の黒人男性が警察官に撃たれるという事件があった（Holpuch and Barton 2016）。この黒人男性は自閉症の男性が持っているのは銃ではなくおもちゃのトラックであり、自分は行動療法士だということを口頭で説明したが、撃たれてしまった。この事例で注目されるのは、黒人男性が地面に横たわり両手を挙げるといった姿勢をとっていたことだ。ここでは状況を説明する男性の発言だけでなく、攻撃の意思がないことを明白に示す身体表現までもが信頼されなかったのである。この身体表現に対する不信は、道徳的にも認識的にも深刻な誤りだと考えられるが、証言的不正義の概念は言葉による証言のみに注目を促してしまう。

以上からわかるのは、認識的実践を狭く捉え、証言という言語的コミュニケーションのみに注目するのでは、言語以前の行動やふるまいに対する信頼性の問題が見落とされてしまうということ、そのような身体表現に対する最低限度の信頼がなければ、証言が強いら

れる状況すら成立しない可能性があるということだ。ストップ・アンド・フリスクは、まずは特定の姿勢をとることを命じることで、主体が言語的コミュニケーションによって意思疎通を図り、自らの疑いを晴らす自由を奪う。身体表現の多様な可能性は制約され、命じられたとおりの姿勢が強制される。取り調べが行われる間、その姿勢に対する信頼はいつ取り除かれるかわからない不安定な状態に置かれる。証言に対する信頼性が問われうる状況が成立するためには、こうした非言語的な身体表現に対するわずかばかりの信頼が保たれている必要があるのである。

フリッカーの認識的不正義の概念が、言語以前のコミュニケーションの問題を考慮していないことは、証言機会の不平等の問題の場合とは異なり、先行研究でも指摘されている (Catala 2020; Lobb 2018; Petherbridge 2022; Shotwell 2017)。A・ロブは、知識として命題的知識を、その伝達手段として言語を範型とするフリッカーの認識的不正義の概念を、言語以前の身体的な知識や知識伝達のあり方へと拡張することを主張している。A・ホネットの承認理論、とくに『物象化』(2005=2011)以降の著作でホネットが語る「先行的な承認」の概念を手掛かりとして、ロブは「言説以前の認識的傷害 (prediscursive epistemic injury)」という第三の認識的不正義を分析している。事例として用いられているのは、ラルフ・エリソンの小説『見えない男』において存在しているにもかかわらず見えない存在としてあつかわれる黒人男性、養育者による幼児のネグレクト、レイプのような身体への暴行である。これらの事例では、身振りや表情といった表出的な身体的コミュニケーションが相手に受け入れられないことにより、合図となるちょっとした動作 (cue) を使って人とやり取りする能力や、認識的な信頼、世界に対する開かれた態度、身体化された自信といったものが掘り崩されるとされている。

ストップ・アンド・フリスクの事例を考えると、認識的不正義の概念をこのような言語以前の身体表現にまで拡張することには意義があると思われる。また、身体表現は言語表現に応答するという点で客体＝モノのふるまいとは区別できる以上、証言的不正義の被害者を「客体」とみるか「他者」とみるかという上で触れた問題も、身体表現という観点を取り入れて再検討すべきだろう。だが、こうした拡張は証言的不正義への介入策を考案する手がかりを提供するというよりも、むしろ、問題の根深さを示す。いったいどうすれば、両手を挙げるという明白なメッセージに対する信頼すら取り払われてしまう深刻な事態を解消できるだろうか。次に検討する要因は、きわめて限定的にはあるが、この問いに答える可能性を含んでいる。

5.3 証言を通じた知識取得への依存

最後にもう一度、ストップ・アンド・フリスクの問題に戻ろう。ニューヨーク市警によるストップ・アンド・フリスクについては、上述したように、裁判がきっかけとなって改革が進められてきた。その一つに身体装着カメラの導入がある。これは警察官が制服に装着する小型のカメラで市民と警察官のやり取りを映像と音声で記録する装置である（今野・高橋 2020: 28）。身体装着カメラによる撮影やその場に居合わせた市民による携帯電話などでの撮影は、警察官と市民の双方にカメラの存在を意識させることにより、不当な発言や行動を抑制する可能性がある。それはまた、しばしば市民と警察官の主張が対立する緊迫した場面を記録することで、取り締まりの妥当性に関する事後的な検証をより公正なものにする可能性があるだろう。映像という証拠がなければ、取り締まりが不当であったかどうかは、当事者やその場に居合わせた第三者の証言によって判断されることになるが、その際には証言的不正義が生じる可能性がある。これに対し、映像という証拠があれば、証言の必要性は相対的に低下する。このように考えれば、証拠を残すという行為には、不当な発言や行動を抑制するとともに、証言的不正義が起こりうる状況を未然に防ぐ可能性があるといえる。カメラが発言と行動の双方を記録する以上、この効果は言語的な表現に限らず、前節でみた身体表現にも及ぶだろう。

ところでこの証拠を残すという単純な介入策は、フリッカーの証言的不正義の概念からは導出されにくいようにみえる。というのも、フリッカーは証言に対する信頼性が不当に信頼されないことを軸に証言的不正義の概念を組み立てており、証拠についてはあまり検討していないからだ。先行研究に関しても同様の傾向がうかがわれる。サーベイした限りでは、M・サリバン（2017: 295）が、裁判における認識的不正義と闘う方法の一つとして、警察や市の監視カメラ映像を利用することを提言しているだけだった。

だが、証拠という観点から見直すと、フリッカーの証言的不正義の概念からは見落とされている問題があることに気付かされる。架空の二つの状況を使って考えてみよう。一つは、労働者は怠け者であるという偏見をもつ使用者が、残業を続ける労働者の言う「もう無理です」という言葉を信頼せずに働かせ続けた結果、労働者が過労死してしまったという場合である。もう一つは、同じ労働者が「大丈夫です」と言い、使用者がこの言葉を信頼して働かせ続けた結果、労働者が過労死してしまったという場合である。両者は労働者の死という同一の結末を迎えている。しかし、証言的不正義によってカバーすることができるのは、前者のケースだけである。後者は、労働者という社会的アイデンティティに対

する偏見が介在しておらず、証言の信頼性も引き下げられていないため、証言的不正義の概念を適用することができない。しかし、証拠という観点を導入すると、両者には共通の問題として扱える側面があることがわかる。それは、証拠を通じた知識の取得——たとえば、残業時間や健康状態の確認——が可能であるにもかかわらず、その可能性が追求されずに証言を通じた知識の取得のみが行われているということである。証言の信頼性を適切に評価するためには、証言を通じて取得された知識と証拠を通じて取得された知識を比較し、どちらがより確実な知識なのかを判断することが求められる場合があると考えられる。その場合に証言を通じた知識取得のみに依拠することは不正であるといえるかもしれない。フリッカーの証言的不正義の概念からは、こうした証言を通じた知識取得のみに依拠してしまうことの問題が見落とされる危険性がある。この問題は先行研究が指摘してきた証言に対する信頼性の過剰という問題とは水準が異なる。というのも、ここでは個々の証言に対する信頼性の過剰が問題となっているのではなく、証拠という知識取得の形態に対して証言という知識取得の形態に過剰に依拠することが問題となっているからだ。

証言に頼らざるを得ない状況が問題を作り出している場合、証言ではなく証拠に依拠できる状況を作り出すことが介入策になりうる。ストップ・アンド・フリスクの場合は身体装着カメラや市民による撮影が、過労死の場合は、労働時間に関する基準や過労死の危険を判断するチェック項目を作成し、その参照を義務化することが、状況を改善する可能性がある。もちろん、こうした解決策がどの程度効果的かは検討の必要がある。身体装着カメラの抑止効果についてはその限界が指摘されている（今野・高橋 2020: 29）。それだけでなく、証拠を残すという選択は、残された証拠の価値をどのように判断し、どう使用するのかという新たな問題も提起する。このように検討すべき課題は多々あるのだが、証拠に依拠するという技術的・制度的解決策は、徳の涵養とは異なる介入策の可能性を示すものであり、注目に値すると思われる。

6. おわりに

本稿では、ストップ・アンド・フリスクという現実の事例の分析を通じて、証言的不正義が加えられる状況の成立にかかわる三つの要因とそのそれぞれがもたらす問題を指摘するとともに、それらの問題を扱えるように認識的不正義をめぐる議論を拡張することを提案してきた。第一の問題は、証言が強いられる機会に特定の集団が不当に多く置かれるこ

との問題であり、そのような状況の解消や強化にかかわる可能性をもつ認知的テクノロジーの分析を認識的不正義の分析に取り込むことの必要性を主張した。第二の問題は、証言に先行する非言語的な身体表現に対する信頼の問題であり、証言以前の表情や身振りといった身体表現を含めるかたちで証言的不正義の概念を拡張することを主張した。第三の問題は、証言的不正義の概念が証言を通じた知識取得の形態に過剰に依拠する傾向をもつことの問題であり、証拠を通じた知識取得という介入策を選択肢に含めるように証言的不正義の概念を構成し直すことを主張した。以上を通じて、本稿は認識的不正義の事例分析が認識的不正義の成立にかかわる多様な要因に注目することで、介入のポイントを見つけ出すことができることを示した。もちろん、課題もある。今回の分析ではストップ・アンド・フリスクに着目した。証言的不正義が問題となりうる事例は他にもありうるが、そうした他の事例において今回と同様の分析が可能だとは限らない。本稿ではあくまで探索的に関連しうる要因を見つけ出しただけであり、一体どのような要因を考慮に入れば対象となる問題について包括的な分析ができたといえるのかは明らかでない。事例分析を進めていくためには、証言的不正義が問題となるような相互行為のタイプや分析にあたって考慮すべき要因を体系的に明らかにする必要がある。また、フリッカーが提唱する徳の涵養が聞き手側の主体性に期待するのに対して、今回提示した介入策は聞き手側の主体性を制限する方向性をもつ。このような性格の異なる介入策を比較評価する視点も必要だろう。証言的不正義を具体的事例に適用するうえでの困難という上述した問題もある。ようするに、認識的不正義の概念を社会学的に応用していくための理論の開発が必要であるが、それは今後の課題としたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19H01647、JP22K20198の助成を受けたものです。

注

- 1) 本稿執筆後に飯塚（2022）を知ったが、内容に反映することができなかった。

文献

- 堀内進之介, 2019, 「予測アルゴリズムに基づく与信管理の功罪——ライフチャンスへの影響とその対策の有効性の検討を中心に」『社会情報学』8(2): 169-85.
- 飯塚理恵, 2022, 「認識的不正義」『哲学の探求』49号: 2-11.

- 今野健一・高橋早苗, 2020, 「ニューヨーク市の最近のポリシング改革——Floyd 訴訟連邦地裁判決後の取り組み」『山形大学紀要 (社会科学)』51(1): 19-36.
- , 2022, 「パンデミック下のニューヨーク市におけるポリシング改革——ブラック・ライブズ・マターの高揚と銃器犯罪の上昇」『山形大学紀要 (社会科学)』53(1): 35-52.
- 榎原英輔, 2020, 「分類と対話——石原孝二『精神障害を哲学する』書評論文」『科学哲学』53(1): 89-102.
- 佐藤邦政, 2019a, 「解釈的不正義と行為者性」『倫理学年報』68(0): 247-61.
- , 2019b, 『善い学びとはなにか——〈問いはぐし〉と〈知の正義〉の教育哲学』新曜社.
- 鶴田想人, 2022, 「認識的不正義と当事者研究——科学論の「第三の波」を再考する」『科学史研究』60: 377-81.
- 山本龍彦, 2015, 「予測的ポリシングと憲法——警察によるビッグデータ利用とデータマイニング」『慶應法学』31: 321-45.
- Bernstein, Nora, 2016, "Epistemic Exploitation," *Ergo*, 3 (22): 569-90.
- Catala, Amandine, 2020, "Metaepistemic Injustice and Intellectual Disability: A Pluralist Account of Epistemic Agency," *Ethical Theory and Moral Practice*, 23 (5): 755-76.
- Coady, David, 2010, "Two Concepts of Epistemic Injustice," *Episteme*, 7 (2): 101-13.
- , 2017, "Epistemic Injustice as Distributive Injustice," Ian James Kidd, José Medina and Gaile Pohlhaus eds., *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice*, London: Routledge: 61-7.
- Daukas, Nancy, 2020, "Epistemic Justice and Injustice," M. Fricker, P. J. Graham, D. Henderson, and N. J. L. L. Pedersen eds., *The Routledge Handbook of Social Epistemology*, New York: Routledge, 327-34.
- Davis, Emmalon, 2016, "Typecasts, Tokens, and Spokespersons: A Case for Credibility Excess as Testimonial Injustice," *Hypatia*, 31 (3): 485-501.
- Dotson, Kristie, 2014, "Conceptualizing Epistemic Oppression," *Social Epistemology*, 28 (2): 115-38.
- Fricker, Miranda, 2007, *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*, Oxford: Oxford University Press.
- , 2016, "Epistemic Injustice and the Preservation of Ignorance," Rik Peels and Martijn Blaauw eds., *The Epistemic Dimensions of Ignorance*, Cambridge: Cambridge University Press: 160-77.
- , 2017, "Evolving Concepts of Epistemic Injustice," Ian James Kidd, José Medina and Gaile Pohlhaus eds., *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice*, London: Routledge: 53-60.
- Holpuch, Amanda and Eric Barton, 2016, "Florida police shoot black man lying down with arms in air: Video shows therapist moments before he was wounded by police officer while trying to get his autistic patient to comply with officers," *Guardian*, July 21, 2016, (Retrieved October 4, 2022, <https://www.theguardian.com/us-news/2016/jul/21/florida-police-shoot-black-man-lying-down-with-arms-in-air>).
- Honneth, Axel, 2005, *Verdinglichung: Eine anerkennungstheoretische Studie*, Suhrkamp: Frankfurt am Main. (辰巳伸知・宮本真也訳, 2011, 『物象化——承認論からのアプローチ』法政大学出版局.)
- Joh, Elizabeth E., "Policing by Numbers: Big Data and the Fourth Amendment," *Washington Law Review*, 89 (1): 35-68.
- Lobb, Andrea, 2018, "'Prediscursive Epistemic Injury': Recognising Another Form of Epistemic Injustice?", *Feminist Philosophy Quarterly*, 4 (4). Article 3.
- Mason, Rebecca, 2011, "Two Kinds of Unknowing," *Hypatia*, 26 (2): 294-307.
- McKinney, Rachel, 2016, "Extracted speech," *Social Theory and Practice*, 42 (2): 258-84.
- Medina, José, 2011, "The Relevance of Credibility Excess in a Proportional View of Epistemic Injustice: Differential Epistemic Authority and the Social Imaginary," *Social Epistemology*, 25 (1): 15-35.
- Mills, Charles, 2007, "White Ignorance," Shannon Sullivan and Nancy Tuana eds., *Race and*

- Epistemologies of Ignorance*, New York: SUNY Press: 13-38.
- Nihei, Mariko, 2022, "Epistemic Injustice as a Philosophical Conception for Considering Fairness and Diversity in Human-centered AI Principles," *Interdisciplinary Information Sciences*, 28 (1): 35-43.
 - Peart, Nicholas K., 2011, "Why is the N.Y.P.D. after me?" *The New York Times*, December 18, 2011.
 - Petherbridge, Danielle, 2022, "A Fourth Order of Recognition?: Accounting for Epistemic Injustice in Recognition Theory," Paul Giladi and Nicola Mcmillan eds, *Epistemic Injustice and the Philosophy of Recognition*, New York and London: Routledge, 90-135.
 - Pohlhaus, Jr., Gaile, 2012, "Relational Knowing and Epistemic Injustice: Toward a Theory of "Willful Hermeneutical Ignorance,"" *Hypatia*, 27 (4): 715-35.
 - , 2014, "Discerning the Primary Epistemic Harm in Cases of Testimonial Injustice," *Social Epistemology*, 28 (2): 99-114.
 - , 2017, "Varieties of Epistemic Injustice," Ian James Kidd, José Medina and Gaile Pohlhaus eds., *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice*, London: Routledge, 13-25.
 - Shotwell, Alexis, 2017, "Forms of Knowing and Epistemic Resources," Ian James Kidd, José Medina and Gaile Pohlhaus eds., *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice*, London: Routledge: 79-88.
 - Sullivan, Michael, 2017, "Epistemic Justice and the Law," Ian James Kidd, José Medina and Gaile Pohlhaus eds., *The Routledge Handbook of Epistemic Injustice*, London: Routledge: 293-302.